

〔語釈〕○仏名Ⅱ仏名会。陰曆十二月十九日から三日間、朝廷及び諸国の寺院で、仏名経を讀誦し、三世の諸仏の名号を唱え、懺悔滅罪をする法会。ここは、個人の家か。

〔現代語訳〕十二月 仏名会の絵に

仏名会を催すこの家は、夜が更け風までもが激しく吹いて寒さをつのらせます。仏名経の御利益に加えてこんな風が吹き払うところでは、残っているあなたの罪はあるはずがありませんよ。

〔平成十年十一月三十日受理〕

「し」「も」は強意の助詞。時もあろうに今日。○相坂山Ⅱ逢坂山。

滋賀県大津市逢坂にある山。甲斐、信濃等から献上される駒は、逢坂山を越えて京に入った。○もち月のこまⅡ信濃国望月の牧場から献じた馬。「もち月」は満月の意を掛ける。

〔現代語訳〕八月 駒を牽く絵に

折もおり、望月の牧場から馬が献上される今日の日、まずこの逢坂山の山の端に姿を現した満月よ。

〔参考〕古今和歌六帖第一に「こまひき」の題で、「あふさかの関のし水に影みえていまや引くらん望月の駒（一七六 づらゆき）」以下七首が収められている。すべて駒を牽いてくることを詠んでおり、儀式を描写するものではない。この歌も、駒を牽いて逢坂山を越える光景を描いた絵に添えるものであろう。

九月九日

20 けふを見て後こそしらめ菊のはなきくにたがはぬしるしありとは
〔語釈〕○九月九日Ⅱ重陽の節句。菊の上に綿をかぶせ、露を含んで菊の香の移った綿で身を拭うと老いを除くとされた。○菊の花Ⅱ中国周の穆王の時代に、追放された童子が菊の咲く仙境の水を飲んで長寿を得たという菊水慈童の伝説があった。日本でも、菊に延年の効能があるとして菊のきせ綿で身を拭い重陽の節宴では菊酒を飲んだ。○きくⅡ「聞く」と「効く」との掛詞。「菊の花」と頭韻をふむ。

〔現代語訳〕九月九日の絵に

今日は重陽の節句でさまざまに菊をもてはやしているけれど、あとになってからよくわかるはずだよ、この菊の花が話に聞いたのと違わない不老不死の効能があるとは。

十月、あじろ

21 紅葉さへきよるあじろのてにかけて立つしら浪はから錦かも

〔語釈〕○あじろⅡ網代。冬、川の瀬などで氷魚を捕るための仕掛け。竹や木を編んだものを連ねて、端に簀を取り付ける。○てⅡ本体から差し出た部分。ここでは、網代の支柱である網代木を指すか。○かけてⅡ川の流れが網代にかかる意。「手にかけて」で、手を下して、思い通りにの意。○立つⅡ「立つ」と「裁つ」との掛詞。○から錦Ⅱ中国から伝来した唐錦。赤や黄の紅葉が流れ集まった様子をたとえた。「しら浪」と対照させている。

〔現代語訳〕十月 網代の絵に

氷魚だけではなく紅葉までもが寄ってくる網代だから、流れに立つ白波は、まるで手にかけて裁たれる目もあやな唐錦といったところだよ。

〔参考〕古今和歌集巻第五 二八三 題しらず よみ人知らず

竜田河もみぢみだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ

十一月

22 水上に嵐吹くらし山川のせにもみぢの早くみゆれば

〔語釈〕○吹くらしⅡカ行四段活用動詞「吹く」終止形＋原因推量の助動詞「らし」。○早くⅡまたその時期ではないのに。○山川Ⅱ山間を流れる川。山から流れ出した川。

〔現代語訳〕十一月

水上では嵐が吹いたらしい、山川の瀬に早くも紅葉が見えるから。

十二月、仏名

23 よを寒み風さへはらふ宿なればのこれる君がつみはあらじな

四月、神まつる

15 夏山にをれるさか木のはをしげみまつりまさるはけふにざりける
〔語釈〕○神まつる〓陰曆四月中の酉の日に、賀茂祭が行われた。

○さかき〓榊。ツバキ科の常緑樹。神事に用いる。○しげみ〓茂っている。
「み」は原因理由を表す接尾語。○まさる〓一層ゝする。○ざりける〓「ぞありける」の約。係助詞「ぞ」＋ラ変動詞
「あり」連用形＋詠嘆の助動詞「けり」連体形

〔現代語訳〕四月 賀茂祭の絵に

夏を迎えた山で折ってきた榊はよく葉も茂っている。この榊葉の茂りのように、ますます集中し熱心におまつりするのは今日の日であることよ。

五月五日

16 さは水になくつるのねをたづねてやあやめの草を人のひくらん

〔語釈〕○五月五日〓端午の節句。菖蒲を葺き、またその根の長さを競う。○さは水になくつるの〓「ね」を導く序詞。鶴は千歳の寿命を保つという縁起の良い鳥である。○ね〓鶴の「音」と「根」との掛詞。○たづねてや〓尋ねてや。ナ行下二段活用動詞「尋ぬ」連用形＋接続助詞「て」＋疑問の係助詞「や」。「尋ぬ」は、跡を求めて行く、ありかを探す意。○あやめの草〓菖蒲は邪気を払うとされた。

〔現代語訳〕五月五日の絵に

沢で鳴く鶴の声をたよりにたどりながら、この人は菖蒲の根を探つて引いているのだろうか。

六月、はらへ

17 夏草にはらへかくれど久堅のあまつつみとはつゆやけぬらん

〔語釈〕○はらへ〓夏越の祓え。陰曆六月晦日に、宮廷や神社で行われる大祓えの神事。半年間の罪や汚れを除く。○久堅の〓「あま」の枕詞。○あまつつみ〓天つ罪。「つ」は連体修飾語を作る格助詞。○けぬらん〓消ぬらんの略か。ヤ行下二段活用動詞「消ゆ」連用形＋強意の助動詞「ぬ」終止形＋現在推量の助動詞「らん」連体形。

〔現代語訳〕六月祓

我が身に負った罪を茂った夏草に払いかけるのだけれど、この草に宿った露は降りかかる罪を天からのものとして引き受け、消えてしまふのだろうか。

七月

18 七夕の心をくみてあまの川雫に袖のぬれぬべきかな

〔語釈〕○七夕〓たなばたつめ。織女。○心をくみて〓心情を推し量って、思いやつて。「くむ」「あまの川」「雫」「ぬる」は縁語。

〔現代語訳〕七月

一年に一度の逢瀬しかない織女の心を思いやると、まるで天の川の雫に濡れたように、私の袖もぐっしりと涙に濡れてしまいですよ。

八月、こまひき

19 今日生まれ相坂山の山のはに先いできぬるもち月のこま

〔語釈〕○こまひき〓駒牽。陰曆八月、天皇が紫宸殿に出御され、諸国の牧場から献じた馬をご覧になって御料馬を定めた儀式。ここでは、献上の駒を牽くこと。○今日生まれ〓「今日しもあれ」の約。

いけに、みづとりあり

11 あさ氷とけにけらしな水の面にやどるには鳥ゆききなくなり

〔語釈〕○あさ氷Ⅱ朝氷。明け方の冷え込みで張る薄い氷。○とけにけらしなⅡ解けてしまったらしいよ。カ行下二段活用動詞「解く」連用形＋完了の助動詞「ぬ」連用形＋推量の助動詞「けらし」終止形＋詠嘆の終助詞「な」○やどるⅡ宿泊する、暮らす意。○には鳥Ⅱ鳩鳥。水鳥の一種。かいつぶり。○なくなりⅡカ行四段活用動詞「鳴く」終止形＋推定の助動詞「なり」終止形。鳩鳥が動き回る鳴き声を聞いて、氷が解けたことを推量したのである。

〔現代語訳〕池に水鳥がいる絵に

朝張った薄い氷はもう解けてしまったらしいなあ。水の上で眠った鳩鳥が、あちらこちら泳ぎ回って鳴くようだ。

雪ふる日、あづまのかたにおひつらねたり

12 旅の空くもるくるしなあづまのゆききのかたもみえぬ白雪

〔語釈〕○あづまのかたⅡ東の方。「あづま」は、京より東の地を指す。○おひつらねたりⅡ追ひつらねたり。ハ行四段活用動詞「追ふ」連用形＋ナ行下二段活用動詞「連ぬ」連用形＋存続の助動詞「たり」終止形。「追ふ」は、目的地に向かって行く意。「連ぬ」は、列を作る、伴って行く意。○旅のそらⅡ旅先でながめる空、旅先。○くるしなⅡ形容詞「苦し」終止形＋詠嘆の終助詞「な」。○ゆききⅡ往来。「白雪」の「ゆき」と音を重ねた。

〔現代語訳〕雪の降る日、東国を指して一行が旅をしている絵に

旅の空がかき曇るのはつらいなあ。東国へ向かう道の行き来さえわからないほど、激しく降り紛う白雪よ。

田のなかに水ひくをのこあり

13 とほ山田たねまきおける人よりもせきの水はもりまさるらん

〔語釈〕○田のなかに水ひくⅡ田植えのため、田に水を入れているのである。○とほ山田Ⅱ里から遠く離れた山にある田。○たねまきおけるⅡ種を播いておいた。もみを播いて苗を育てたのである。○井堰Ⅱ川の中に杭を打ったり石を積んだりして、水を堰き止めた所。○もりまさるらんⅡ「漏り」と「盛り」との掛詞。「まさる」は、一層増大する意。「らん」は現在推量の助動詞。実際は見えていない井堰の様子を想像している。「漏る」は水があふれること、「盛る」は水がたまることで、どちらも農作業の開始にあたって水が潤沢であることをいう。

〔現代語訳〕田の中に水を引き入れる男のいる絵に

遠くの山田では、耜を播いておいた人の背丈よりもっと深く井堰の水がたまり、どんどんあふれ出していることだろう。

いけのほとりのふぢのはな

14 藤浪のかかれるきしの松はおひて若紫にいかでさくらん

〔語釈〕○藤浪Ⅱ藤の花房のようすを浪にたとえた語。○かかれるⅡ藤の花が松に咲きかかる様子。「浪のかかれるきし」で、岸辺の景色も描写する。○おひてⅡ老いて。「若紫」と対照させる。○若紫Ⅱ藤の花房がかかった老松が、すっかり若紫に見えるというのである。

〔現代語訳〕池のほとりの藤の花の絵に

波が打ち寄せる岸辺の松に、藤浪がかかっている。この松はすっかり老いてしまったのに、どうして若紫に華やいで咲いているのだろう。

貫之の歌が名残を惜しみながら別れるのに対し、順のほうは他人の家ながらすっかり腰をおちつけたようすを詠んで、好対照である。

人の家に、をんな二三人出でて、あかつきに花みる

7花の色やよのまの風にかはるとてまづおきながら出でてこそみれ
 「語釈」○よのまの風Ⅱ夜の間に吹く風。○おきながらⅡ「おき」は「起き」と朝露が「置き」との掛詞。「ながら」は動詞の連用形について、一つの動作と同時に他の動作を行う意を表す接続助詞。朝露が置く頃、起き出してみるの意。

〔現代語訳〕人の家で、女が二三人庭に出て、暁に花を見ている絵に
 美しく咲きにおう花々が、夜の間に吹く風にはらはらと散ってしまふかと思うと心配で、早朝起き出すとすぐに庭に出て花の様子をみることだよ。

〔参考〕拾遺和歌集巻第一 二九 元良親王

あさまだきおきてぞ見つる梅の花夜のまの風のうしろめたさに

うみのつらに、しほやき、あみひく

8見わたせばあまのたくなは名のみして立つはしほやく煙なりけり
 「語釈」○しほやくⅡ海水を煮て、塩を作る。○あまⅡ海人、漁夫。○たくなはⅡ栲縄。「栲」で作った縄。漁夫が用いた。栲は楮の古名。「炊く名は」（炊くという噂）を掛ける。○名のみしてⅡ名ばかりでの意。

〔現代語訳〕海辺で塩を焼き、綱を引く絵に

この海辺をはるばると見渡すと、海人が炊くという噂は名ばかり栲縄も名ばかりで姿は見えず、立っているのは塩焼きの煙だけであつたよ。

九月晦日、もみち見る

9いかなればもみちにもまだあかなくに秋はてぬとはけふはいふらん

〔語釈〕○九月晦日Ⅱ「晦日」は、月の末日。陰暦では七・八・九月が秋にあたるので、九月の晦日は秋の最終日である。○あかなくにⅡカ行上二段活用動詞「飽く」未然形＋「なく」＋「に」。「飽く」は、飽きる、満足する意。「あかなくに」で、飽きないのに、まだ満足しないのの意。○秋はてぬⅡ「秋果てぬ」（秋が終わってしまった）と「飽きはてぬ」（飽きてしまった）との掛詞。

〔現代語訳〕九月末日、紅葉を見ている絵に

紅葉もまだ十分堪能せずまだまだ秋の美しさを愛でていたいと思ふのに、どうして今日は「あきはてぬ」（飽きてしまった）といっているのだろう。

雨の中に残菊をみる

10しぐれつつうつろふみれば菊の花色をしめしめふる雨にぞ有りける
 「語釈」○残菊Ⅱ九月九日の重陽の節句を過ぎた菊。○しぐれつつⅡラ行下二段活用動詞「しぐる」連用形＋動作が並行して行われる意を表す接続助詞「つつ」。「しぐる」は、時雨が降る意と涙が落ちる意。ここでは、しぐれにぬれそぼつ菊の姿を表す。○うつろふⅡ色変わりする。○しめしめⅡ（色を）「染め染め」と副詞「しめじめ」との掛詞。「しめじめ」は、しっとり濡らす様子。

〔現代語訳〕雨の中に咲く残菊を見る絵に

残りの菊が濡れながら色変わりしてゆくのを見ると、まったく花の色を染めながらしつとりと降る時雨なのだなあ。

〔現代語訳〕

山桜の木の下を吹く風お前がもし情を持っているなら、花の香りだけを運べよ、決して花を散らすのではないぞ。

〔参考〕拾遺和歌集巻第一 六四 つらゆき

さくらちるこのした風はさむからでそらにしられぬ雪ぞふりける

古今和歌集第十六 八三二 かむつけのみねを

ふかくさののべの桜し心あらばことしばかりはすみぞめにさけ

うの花さげる家に時鳥きく

4 卯の花のをらまくほしき山里に時鳥さへきつつなくなり

〔語釈〕○うの花Ⅱウツギ。「憂」を掛ける。○をらまくほしきⅡ

ラ行四段活用動詞「折る」+推量の助動詞「む」未然形+準体助詞

「く」+形容詞「欲し」連体形。折りたい。

〔現代語訳〕卯の花が咲いている家で、ほととぎすを聞いている絵に

卯の花が咲き乱れるこの山里では憂くつらい思いがするので、卯の花を折りとして気持ちを晴らしたいと思うのにそれもできないでいる。するとそこに、ほととぎすまでがやってきて、嘆きをつらせるように鳴き声をきかせるのだ。

〔参考〕古今和歌集第三 一六〇 郭公のなくをききてよめる

つらゆき

五月雨のそらもとどろに郭公なにをうしとかよただなくらむ

みあれひく

5 わがひかみあれにつけていのことなるすずもまづ聞えけり

〔語釈〕○みあれⅡ御阿礼木。「み」は接頭語、「あれ」は生まれる

意。陰曆四月の中の丑の日に、葵祭の前儀として行われる、八瀬村

の御生の社から別雷神の降臨を迎える神事で、鈴を付けた木に綱を付け人々が引いた。鈴が鳴ると祈願が成就するとされた。○つけてⅡちなんて、関して。○なるなるⅡ鈴が「鳴る」と事が「成る」との掛詞。

〔現代語訳〕人々が御阿礼木を引いている絵に

引く御阿礼木につけても、私の願い事は「成る、成る」と、早くも鈴が鳴るのが聞こえるよ。

人の家の泉のつらにすずむ

6 山の井をかつ結びつつ夏衣ひもうちとけてすずむ比かな

〔語釈〕○人の家Ⅱ他人の家、よその家。「の」は所有格ではなく主語を表すともとれるが、その場合わざわざ「人の」と断る必要はないであろう。○つらⅡほとり、側。○山の井Ⅱ山中にわき水がたまって、自然にできた井戸。○かつ結びつつⅡ「掬ぶ」は手のひらで水をすくい汲む意。「結ぶ」との掛詞。「つつ」は反復・継続の意を表す。「かつ」は、一方ではⅡ一方ではⅡするの意。下に「うちとけて」とあり、「結ぶ」と「解く」とを対照させる。○ひもⅡ「紐」と「日」との掛詞。「日」は、時、折。○うちとけてⅡ「紐がほどけて」の意と「警戒心がなくなつて、くつろいで」の意の掛詞。

〔現代語訳〕人の家を訪ねて、庭の泉のほとりに涼んでいる絵に

冷たい山の清水を手で掬びすくって飲むうちに、夏衣の紐もいつの間にか解けて、すっかりくつろいで涼むころだなあ。

〔参考〕古今和歌集巻第八 四〇四 しがの山ごえにて、いしあ

のもとにてもものいひける人のわかれけるをりによめる 紀貫之
むすぶてのしづくににごる山の井のあかでも人にわかぬるかな

『源順集』 康保五年屏風歌注釈

原田 真理

本稿は、『源順集』に「康保五年、女五男八親王の御屏風歌」として収録された和歌二十三首（国歌大観番号202～224）の注釈である。康保五年は西暦九六八年、この年八月十三日に安和に改元された。この「康保五年」は底本とした国歌大観本によるが、『源順集』諸本を見ると「康保」は共通ながら「二年」「三年」とあり、後述するように「二年」が適当と考えられる。『本朝皇胤紹運録』によれば、「女五親王」は村上天皇第五内親王盛子、母は源庶明女。生年不詳、康保二年着裳、左大臣顕光の室、女御元子等の母。長徳四年（九九八）七月二十日薨去。「男八親王」は村上天皇第八親王、永平。四品兵部卿、母は藤原師尹女の芳子。康保二年誕生、永延二年（九八八）十月十二日二十四歳で薨去。康保二年ならば、盛子の裳着・永平の誕生と、祝いの宴席が設けられたことが想定される。この『源順集』の屏風歌は本来二組の月次屏風歌と思われる、盛子・永平それぞれの祝賀のために制作されたものであろう。

春あなにか家に女にもいふをとこあり

1道とほみ人もかよはぬ梅の花君には風やわきてつけつる

〔語釈〕○道とほみ〓道が遠いので。「み」は原因理由を表す接尾語。○わきて〓副詞。特別に、とりわけ。

〔現代語訳〕春、田舎の家で、主の女に話をしている男が描かれて

道が遠いので訪れる人もいない梅の花なのに、あなたはよく見つけたこと。あなたには、風が特別におしえたのでしょうか。

いる絵に

きじの鳴くをききて、山のさくらをみる

2かりにくる人もこそきけ春の野にあさなくきじの近くも有るかな

〔語釈〕○かり〓「仮」「狩」の掛詞。○きけ〓力行四段活用「聞く」已然形。係助詞「こそ」の結び。

〔現代語訳〕雉の鳴く声を聞き、山の桜を見る絵に

軽い気持ちで狩に来る人が聞きつけてしまうのではないか、春の野で朝鳴く雉の声がすぐ近くに聞こえるよ。

〔参考〕古今和歌六帖第二 一一八七 きじ

春ののにあさなくきじのつまごひにおのがありかを人にしられて

3山桜このした風し心あらば香をのみつてよ花ならしそ

〔語釈〕○このした風し〓木の下を吹く風が。「し」は強意の副助詞。○心あらば〓もし情があるならば、情趣を解するならば。未然形+接続助詞「ば」で、仮定条件を表す。○つてよ〓タ行下二段活用動詞「伝つ」命令形。伝えよ。○ならしそ〓散らすな。「な」

そ」は、動作を禁止する意を表す。